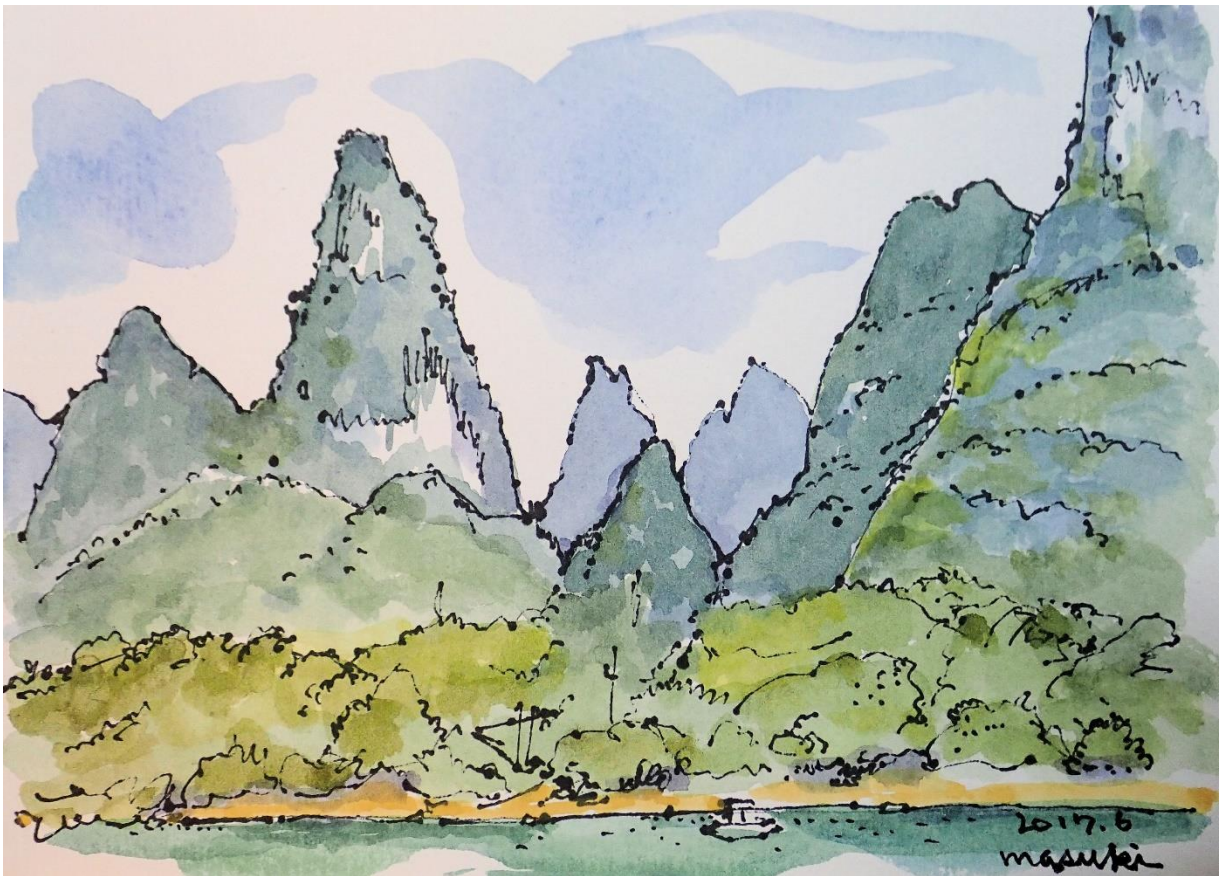


はっけんやまの かいしゅんじゅう
八剣山の会春秋

新年号

平成30年1月元日

「八剣山の会春秋・編集部」発行



＜桂林・漓江7＞ 画 小西益樹

年賀状の俳句から

2017.11.30 金城 清三

私が差し出す年賀状には、必ず新年の俳句を付けることにしています。そこで
＜春秋誌＞新年号に因んで、過去の年賀状の句から抜粋した20作品を集めて
みました。郷愁の句が多く（7句）申し訳ありませんが、ご笑覧下さい。

新年の句20句 凡生

奈良に住み琉歌りゅうかぞよかれ今朝の春

※「琉歌」とは琉球の歌、即ち沖縄民謡のこと

元日くや故郷にを離れてひとむかし一昔

初日待つ宇陀には多き記紀の山

元朝の庭に鳩来て吉とせり

許されよ贅ぜいのお節せちの迷い箸



我一語岳父一語や年酒酌む

福寿草近江の寺に算盤碑

読初めいそじなかや五十路半ばの三国志

初風呂や五体の火照りほてりいつまでも

東ひんがしの伊勢へ賑わう初電車

古希にして読初めおもろさうしかな

※「おもろさうし」沖縄や奄美に伝わる古謡。
古事記・万葉集にあたる古典。

戦いくさありし珊瑚の島はつあかねの初茜

初日待つ島を離れて五十年

黒潮の向こうにうちなー初明かり

※「うちなー」とは沖縄の別称。

初夢や鷹の翼で古里へ

元日もんつきどりや紋付鳥が庭にきて

迎えたる後期高齢今朝の春

大和富士仰ぎ希望の年新た



初日の出浜の鳥居ふちの縁の中

雲間よりシャワーの如く初茜はつあかね

(完)

初秋登山「奇岩金勝山」山紀行

企画、案内 安田

2017. 9. 22

まず本稿は2017. 6. 20 発行春秋誌【2017 夏季号】に寄稿した

予告編『近江・磨崖仏・・・金勝山』から始まる。

金勝山は、滋賀県栗東市南部の山地の総称。花崗岩の巨岩がむき出しになった独特な景観が広がる。

昭和の随筆家、白州正子が「素晴らしいというより、凄まじい」と表現した風景。岩に神が宿ると考えた古代信仰の景観。岩の上から琵琶湖、眺望。

山の中腹に、杉木立の参道の奥に金勝寺（こんしょうじ）がある。本堂には、四つの神棚があり、9世紀にこの四神に祈る役目を朝廷より与えられている寺である。古代に仏教文化の重要な拠点であったこの寺は、奈良時代の僧で東大寺の初代別当、良弁（ろうべん）の出身地との説もある？

この山の反対側中腹には、ふくよかで優しい顔をした狛坂磨崖仏（こまさかまがいぶつ）がある。山の中にこれほどの磨崖仏があるのかと驚く。周囲には、瓦の欠片が散らばっている白州はこの磨崖仏を「人里離れたしじまのなかに、山全体を台座とし、その上にどっしり居座った感じである」と表現。

9月の例会で訪れる。参加されたい。

~~~~~

ここからが「**9月の例会**」9月22日の山紀行である。

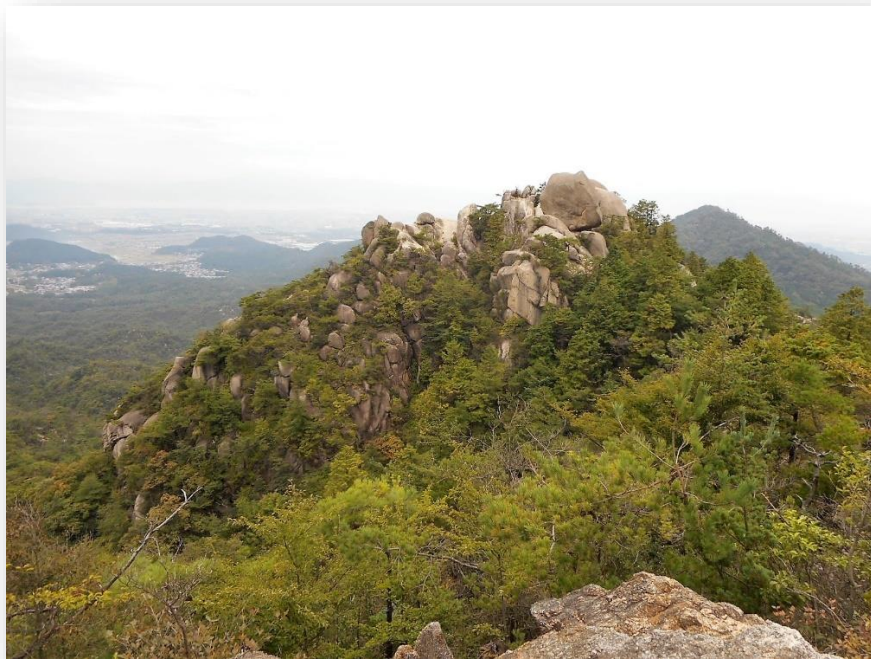
● 曇天、大和富士ホールを7時に出発（同行者須藤さん、美浪さん）。西名阪壬生野IC、信楽、大津信楽線、県道12号を経て近代的なデザインの新名神の大橋脚の下をくぐる。道の駅「こんぜの里」から金勝（「こんぜ」）林道に入る。林道の終点、馬頭観音堂前に駐車、広い。山頂近くまで車で行け、便利。このコースは、登りが少ない。展望が良い。

● 此処より15分で龍王山（605m）頂上。縦走路を1時間で狛坂（こまさか）磨崖仏。この磨崖仏は立派。3体の浮彫（高さ6m、国指定史跡、9世紀初め）。ふくよかで優しい顔をされている。周辺は、寺院跡。  
1200年ほど前、こんな山奥に磨崖仏を彫ったり、寺を建てたり、古代の人の力、宗教の力に驚く。





- 途中の白石峰まで戻り、岩山が連なる天狗岩まで30分の縦走路。岩山だが、道は、しっかりしていて歩きやすいハイキングコース。幸運にも歩行中、降雨に会わなかった。
- 花崗岩の巨岩がむき出しになった独特な景観が広がる。岩に神が宿ると考えた古代信仰の景観。



ハイライト、奇岩の天狗岩に登る。眺望 360 度良好。東に近江富士、三上山。



西に瀬田川河口、近江大橋、円柱状のプリンスホテル。眼下に栗東競馬訓練場。コンビニで買ったおにぎりを食す。途中で出会ったのは、同年輩の 2 人づれ、夫婦づれ、10 人位の団体の 3 組。

- 帰路、金勝寺に立ち寄る。小雨に煙る、苔むした金勝寺は、古刹の趣がある。寺の由緒書に依れば、平城京の東北鬼門を護るため、天平 5 年（733）、聖武天皇の勅願により、国家鎮護の祈願寺として建立。開祖は、東大寺初代別当、良弁僧正。縁の杉木立がある。古代、仏教文化の重要な拠点であった。参道を登りきると仁王門があり、両脇に真っ赤な仁王が立っている。仏像としては、不動明王、良弁像が印象的。今回、特別に馬頭観音堂の観音像も安置されていた。



<おわり>



## 京都一周トレイル第6弾 西山コース紀行文

錦秋の高雄から清滝、嵐山まで歩く

企画者 美浪敏明

11月16日（木）天満台西三丁目バス停に集合し6時43分乗車出発する。前日、野田さんが急遽不参加の連絡が入り、真田さん、安田さん、小生の3名の参加となった。少し寂しい参加人数ですが、最近では参加者も少なく、八剣山の会としては課題である。

前日の天気予報は降水確率午前、午後ともゼロ%で雨の心配はなく、曇り空ではあるが秋晴れを期待しての出発であった。

健脚組の三人であるので歩行コースを高雄槇の尾をスタートとし、嵐山に向かうコースを提案する。変更理由は嵐山到着の方が帰りの交通の便が良いので、時間制約もなく歩け、寄り道しても融通が利く。相談の結果合意を得る。

少人数の利点である。即決であった。

近鉄で榛原から八木経由、京都を目指す。通勤客や学生、一部の観光客で鮎詰め状態で京都に着く。トイレ及びコンビニの弁当を仕入れ中央出口バス停へ向う。運良く発車寸前の臨時バスに乗り込むことができた。車内はやはり満員である。

途中のバス停で大きなトランクを持った外国人男女が乗り込んできた。運転手が気づき **This Bas Takao** どこに行くのかと聞いている。二条城との返事、**No Next Bas** トランクを持っていく場所ではないと判断したのか、機転を利かせたのには感心した。

以後ノンストップでバスに揺られこと約30分高雄槇ノ尾に着く。下車したのは我々を含め5～6名であった。大半は手前の高雄山城で下車されていた。

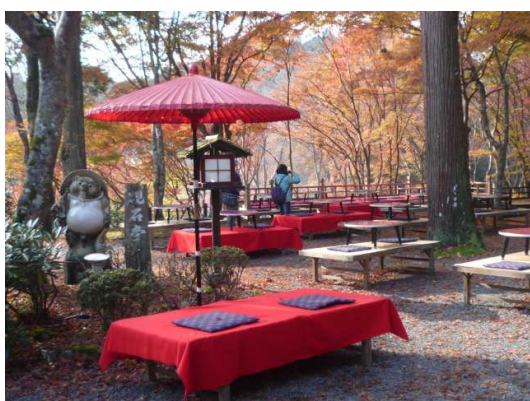
9時30分西山コース標識88から本番スタート、89の西明寺の向う。

清滝川沿いに紅葉が目に入る。早速カメラに収める。



高雄橋を渡る真田さん、安田さん

次は下車が多かった神護寺へ 神護寺高雄山寺は和氣清麻呂公の創建で、国家安泰を祈願する神護国祚真言寺である。弘法大師が入山され平安仏教の中心的な役割を果たす。比叡山や高野山程ではないがかなりの規模である。参道入り口には素人カメラマンのグループがシャッターチャンスを待っている。日が当たるのを待っているのであろう。紅葉に当たると一層鮮やかになる。苔むした屋根などとのコントラストは素晴らしい。参道にはお茶屋などが数件あり景色に溶け込んでいて京風の趣である。入山料600円を支払い見学する。金堂本尊薬師如来、毘沙門天立像、愛染明王像、源頼朝肖像画などを観賞写真お断りである。



参道の茶店



神護寺金堂





心を清めたのち、清滝川の銀雲溪沿いを見とれながらしばらく歩く、落合へ。金鈴橋を過ぎたところで三叉路に出会った。前方はトンネル、片方は峠越えどちらを選択しても嵐山に行ける。コース地図を確認するもトンネル表示がない。迷った末、峠を選択、峠を下ると愛宕念仏寺に出た。まもなく鳥居本に到着、愛宕神社の一之鳥居で茶屋を描く画家がいる。見るとS10号の水彩画である。お上手ですねと声を掛けると写真を撮らせてくれた。横並びでスケッチをしたかったが、企画者の役割上遠慮し写真のみ残す。



銀雲溪



愛宕神社一之鳥居



天龍寺



嵯峨嵐山駅

嵯峨鳥居本町並みを楽しみ、少し遅い昼食をとる。蕎麦屋を見つけコンビニで買ったおむすび弁当と温かいそばを頂く。観光客で溢れる二尊院、落柿舎、竹林の道、天龍寺、渡月橋を見て、JR 嵯峨嵐山へ14時04分の列車に乗車、近鉄京都、八木駅と乗り継ぎもスムーズに行き榛原には16時に着く。バスもなく元気もあるので徒歩で自宅に向かい16時30分には帰宅する。飲み会はなかったが良き友人との一日であった。(文責 美浪)

## 春日山原始林を歩く

2017年 高見 毅

本年度の最終山行は晩秋の世界遺産“春日山原始林を歩く”と、なった。

11月23日 9:04の榛原発の電車。休日でも余裕の車内で早速、今回の企画人の上岡さんから同行の小出、高見に地図の手渡しがあり、以下のコース説明があった。



◆近鉄奈良 ⇨ 興福寺 ⇨ 春日大社 ⇨ 滝坂の道 ⇨  
首切り地蔵⇨ 地獄谷石窟仏 ⇨ 高円ハウエー (春日山原始林)  
⇨ 若草山 ⇨ 春日山遊歩道 ⇨ 奈良公園 ⇨ 近鉄奈良



10時過ぎに近鉄奈良駅到着から興福寺へ。風は強く肌寒いですが空は明るく紅葉も見頃で気持ちはOKだ。

ここでは意味不明の言葉が飛び交い海外からの観光客ばかりで日本語は聞こえず、皆、鹿への餌やりに夢中だ！  
鹿さんも慣れたもので首を振って、もてなしがお上手。



春日大社に参拝をして背を向けると観光客はなくなり日本人ばかり、急に静寂がやってきた。ここは、その昔に剣豪が柳生へ歩いた苔と落ち葉と石畳みの滝坂の道だ。既に健康ハイクを終えて下山してくる人と“こんにちは”と挨拶をしていると、後方からポチャリ気味の娘さんが1人で追いてきた。聞くと柳生の里まで健康ハイクとのことやるね！ 我々は若草山が精一杯と言いながらちょっと熱くなってヤッケを脱ぐ。約1時間半歩いて多くのハイカーが屯するチェックポイントの“首切り地蔵”に到着。ここで陽射があり紅葉もある場所を選び、いつもの簡素な昼食とする。



次は“地獄谷石窟仏”。さて、どんなところだろうと期待して進んでいると、奈良時代に彫られた“毘盧舎那仏、薬師如来、十一面観音”の三体の聖人窟が現れた。まさに歴史。 屋根付の囲いで保護されており、次の世を見守っています。



ここで折り返し、先に横切った高円ハイウェイに戻り偶にしか車の通らないこの道、杉などの大木が林立する春日山原始林の中を若草山に向った。途中、我々と逆方向からのハイカーもあり晩秋の原始林を楽しんでいる。そして、鶯滝の分岐を経て若草山の頂上の駐車場から展望台まで来ると、既に3時前だが、多くの観光客で賑わっていた。風は冷たいが青空で雄大な展望のもと、人それぞれの形で楽しんでいた。平和である。中国の方だろうか、肩出しのドレスで撮影会もやっていた。寒くはないの？





下山は春日山遊歩道、紅葉もあり楽な気分で下っていると、鶯滝の分岐で言葉を交わした男性が追いついて来た。ピンク系のズボンに洒落た帽子で歳は75歳。でも話をしていると深い訳を持っていた。聞くと難病のすい臓ガンを克服してやっと元気になったと言う。余命わずかで発覚し、すい臓を切り取って、インスリンの注射を打って、食事や体重も日々管理していると。そして、早期発見こそ大事や！と、言い残して足早に過ぎ去っていった。(快活で明るい性格が身を守ったようだ)



いつの間にか若草山の馴染みのある場所まで下る。春日野国際フォーラムから振り返ると青空を背に若草山が映える。この辺りの紅葉はまだ見頃で美しい。でも観光客は紅葉より鹿さんに夢中。改めて“鹿さんは偉大なり、神の使いだ”の感じだ。



近鉄奈良駅に16時に到着。

28000歩。約17km よく歩きましたね。上岡さんお疲れ様でした。

(完)

## 宇陀市美術展覧会によせて

美浪敏明

第12回宇陀市美術展覧会が11月3日（金）から6日（月）まで行われる。広報で募集を見て、丁度古希を迎えるに当たって記念にと応募を決めました。又、地元の方に広く作品を観て頂ける良い機会でもあるし、会期も適当と判断し決断しました。

作品は、八剣山の会の行事で参加した大普賢岳登山です。

梯子や鎖場の多い登山道で苦勞して登った記憶が忘れられなくて、写真からではあるが作品にしました。

登山の人物は構図も良く体験から来る臨場感が描けたと自賛しています。

しかし背景の木々の色彩や陰景に苦勞しました。写真からの難しさです。

取材の不足を感じました。

審査概評も樹木の方は木の色彩が難しいですね。少し風景の中の空気感がほしいとコメントされていました。

初出展ではあるが、11月27日（月）に表彰式があり、絵画部門で金賞を受賞しました。皆様のお陰と感謝しています。

しかし市展賞が最高位と解り、次回は取れる様に頑張れとの激励と解釈し、県展にも挑戦したいと考えています。



我慢と根気と努力を心に刻みます。

## 恐怖の双六・五月の思い出

2017年11月30日

赤井友洗

槍沢を滑ってみむとて

〇〇〇（してみむ）とて……。この言い回しは、人によって色々なものが念頭に浮かぶでしょう。まず想起するのは、土佐日記の書き出しに……。男もすなる日記と言うものを女もしてみむとて……。で始まります。

しかし小生がまず思い浮かべるのは、小生の愛して止まない「越中おわら節」の一節です。その歌詞の中に、♪色に咲く あやめ切ろうとて 袂をくわえ 文(ふみ)を落とすな オワラ 水の上♪ 中の「とて」です。(勝手なこだわり、請うご容赦)

前々号の初投稿は5月の尾瀬行きだったのですが、今回の第二稿目は、同じく5月の黒部五郎岳・槍ヶ岳方面です。ただし、前稿同様、はるか昔の事である事をお許し願います。

コースは大阪＝富山地铁有峰＝折立～太郎山～黒部五郎岳～三俣蓮華岳～双六岳～槍ヶ岳の肩～槍平～新穂高＝高山＝大阪でした。メンバーは3人、テント持参のスキー登山。下山最終日は、槍ヶ岳の肩よりある程度槍沢を滑り降り、再び肩まで登り直し、飛騨沢をスキー下降して下山のコースです。山好きの人ならば、槍沢、飛騨沢の説明も不要ですが、一応しておく、槍沢は上高地から槍ヶ岳を目指すときに登る大きな沢の事、飛騨沢は槍ヶ岳から北穂高岳に続く稜線の西側に沢の事です。

この山行きで、今も鮮明に記憶している事がいくつかありますので披露します。

厚かましくも、このような事があってよいものか……

富山地铁の電車を降りてからの事。これは事前の調べが不完全だったが故の事なのですが、太郎山の登り口までタクシーで行く予定だったのが、早朝駅を降りるもそれらしいものは皆無。(夏季のシーズンはバスの運行があるのですが、この時期の運休は想定していた。よってタクシー利用を予定していた。)

そこで、われわれは何をしたか??。なんと、駅の近隣の家を訪問して、車で目的地まで運んでくれないかと懇願してまわったのでした。

小心者の小生は……。こうなればヒタスラ徒歩で登り口まで行こうと思っていたのですが、メンバーの一人(小生と同年齢)、その人こそ我々の山スキーの先生なのですが、家々を尋ね回ったのです。

5月初旬の山間部の事、まだまだ夜が明けきらぬ薄暗い時間帯、家によってはまだ眠りに就いていていてもおかしくない時間帯です。その頃に、登山口まで車を出し



てくれないかと、彼が訪問を始めたのです。何軒か訪問するうちに、軽トラを出してくれる家が見つかり・・・、我々は後ろの荷台に収まったのです。尤も、軽トラは予定外の事ゆえに、お礼の品物も事前の用意はしておらず、ザックの中から有り合わせの物でもってお礼した次第でした。（小生が歩いて行こうと思ったのは、晩秋に薬師岳に行った時、バスはすでに運休で、一人黙々と歩いた経験があったからです。でも、今回はスキー持参の冬の装備だったので、歩くと言ってもかなりハードですし、予定の行程も狂ってしまうのは覚悟でした。）それが奇特的な土地の人の好意で、トラックで搬送ですから感謝感謝でした。

それにしても、一軒一軒、家々を訪問した彼の厚かましさに脱帽でした。まさに、家々の扉を「叩けよ、さらば開かれん」だったのですが・・・。

### 雪庇のうえのテント

登山を始めて3泊目のテントは双六岳直下でした。ここまでは、順調にスキーを進め、途中急な登りはスキーを担ぎ、滑れるところはスキーで登高、下降を繰り返して、太郎山、北の股岳、黒部五郎岳、三俣蓮華岳を越え、双六岳でテントになりました。いよいよ明日は、念願の槍沢滑降が待っています。疲労もあるものの明日を楽しみにして、3人が一つのテントで眠りに就きました。

ウトウトと眠りに就いてどれくらい経過した頃でしょうか、突然、かのスキーの先生が「赤井くん、我々は雪庇の上にテント張っているのと違うか？」と、眠気を吹っ飛ばすような事を言うではないか。「万が一のために、ザイルで這松と各自を結んでおくほうがよいのと違うか」と。恐ろしい事を言います。

稜線にテントを設営しているのは確か、でも幕営地を決めたときは雪庇も考え、少し、稜線から控えたところ幕営地にしたつもりだし・・・。それに、幕営のためには3人で雪面を踏み固めたし、もし、雪庇の上ならその時、踏み抜いているのと違うのではないかと・・・。

いろいろな考えが脳裏を過ぎったものの、この時間まで異常なしに経過しているのだからと、結局はそのままザイルも使わず、寝袋で夜明けを迎えた次第でした。が、「雪庇の上」の一言が恐怖をもたらした。眠っては覚め眠っては覚めの連続で、寝不足はぬぐえませんでした。

この何十年かの後（平成二十一年夏）、知床山脈羅臼岳とその東方の硫黄岳との間で、熊の来襲に脅えつつ二夜を明かしたのですが、その時はこの双六岳の恐怖の夜のテントを思い出さずにはおれませんでした。

念願の槍沢なれど・・・

双六岳から槍ヶ岳への西鎌尾根はスキーは担いでの行程です。尾根を辿ってようよう槍の肩に到着。さてその次は、ザックをおろし、いよいよスキーに履き替えます。

が・・・、やや待てヨ。肩から見下ろす槍沢は一面の雪ですがかなりの傾斜。まさにスキーの上級者のみに許される沢ではないか。勿論、小生にとっては華麗なるパラレルターンなんて不可能の世界。降りるとすれば、いつもの斜滑降、キックターン。反転し再び斜滑降。これの繰り返しで滑り降りるしかありません。それさえも無理とすれば、エッジを外しての横滑りでズルズルと高度を下げるしかありません。横滑りは、滑ると言うよりずり落ちるに近い感じですが、それでも槍沢にスキーの跡を残す事ができます。

それに、今回は槍沢から上高地に降りる予定ではないので、滑り降りた分はスキーを担いで登り返す必要があります。小生はここで熟慮。それに反し、同輩の我が山スキーの先生たる友は、「俺は滑るぞ」との一言、早速下降を始めた。それをじっと見つめる二人。見れば、バジテスト一級のかの先生も、パラレルターンは出来ないと見えて、斜滑降、キックターン、斜滑降の繰り返し。かなり下方に到着しようようスムーズなターンを見せていた。みるみる小さくなってゆく彼、その姿を槍ヶ岳の肩から見下ろしていた我々二人。

小生はさらに思案・・・。ここで槍沢を滑らねば、ここまでスキーを持ってきた「かい」が無いではないか。かと言って、長く下降すれば、登り返すのが大変。そこで、決断。先達が模範を示してくれたように、斜滑降、キックターンの繰り返しをほんの数回でやめる事にして、一応、少しだけ槍沢を滑った次第。当初の意気込みからは、はるかに乖離する事になりました。これで以って滑った事にするには余りに短い距離ですが、僅かとはいえ跡を残す事ができました。尤も、もう一人の友はそれさえ省略だったのだが・・・。

勿論、小生はすぐに槍の肩まで短時間で這い上がったのですが、かなり下方まで滑り降りた彼は、さすがに戻るまでかなりの時間を要しました。こちらはその分、長い休憩時間を持つ事ができたのですが・・・。

彼が戻ってきた後は、今度は槍沢と反対の、飛驒沢をスキーで下降しました。勿論ここも斜滑降～キックターン～斜滑降の繰り返しで高度を下げます。傾斜も多少は緩くなると、かのスキーの先生はシュテムターン、パラレルターンに切り替え。小生は相変わらず同じような初歩的な事を繰り返して技量の差を見せつけられる羨ましさ。また、幕営一式の荷を背にしてのスキーなので、ちょっと気を抜けば転

倒、この起き上がりで体力を消耗してゆくのが辛いところでした。

それでも、一步一步雪の上を歩いて登下降している登山者の傍を、スキーで下る爽快さと優越感は捨てがたいものでした。(登高ルートをスキーで横切ると、そのルートに雪が被さり歩きづらくなり、申し訳ない気持ちも持ち合わせてはおりましたが・・・)

♪いばら離しゃれ オワラ 日が暮れる♪ (越中おわら節)

雪面下降のときは有力な??道具であっても、雪が消え樹林帯の歩行となるとそれが不要な長物になってしまうのは至極当然の事です。山裾の沢にまでたどり着いても雪のある道筋はスキーを滑らせて距離を稼ぐ事ができます。しかし、やがてスキーを脱がなければならなくなる時がやってきます。街の中の短い距離の移動なら、手に持って、或いは肩に担いでの歩行でゆけます。でも延々続く山道となると、背中のザックに結わえての歩行になります。山用のスキー板は比較的短めのもですが、それでも体の上部や横に突き出るのは致し方ない事です。これでブッシュ帯、灌木帯の歩行になります。周囲の障害物に当たらないように、色々姿勢を変えてゆくのですが、背中の重さが身にしみ、ついつい注意が散漫になると樹木等にスキーに当たり、前進をブロックしたり、体のバランスを乱したり、果ては転倒・・・と、散々です。その時は、スキー持参じゃなければよかった・・・と思った事でした。

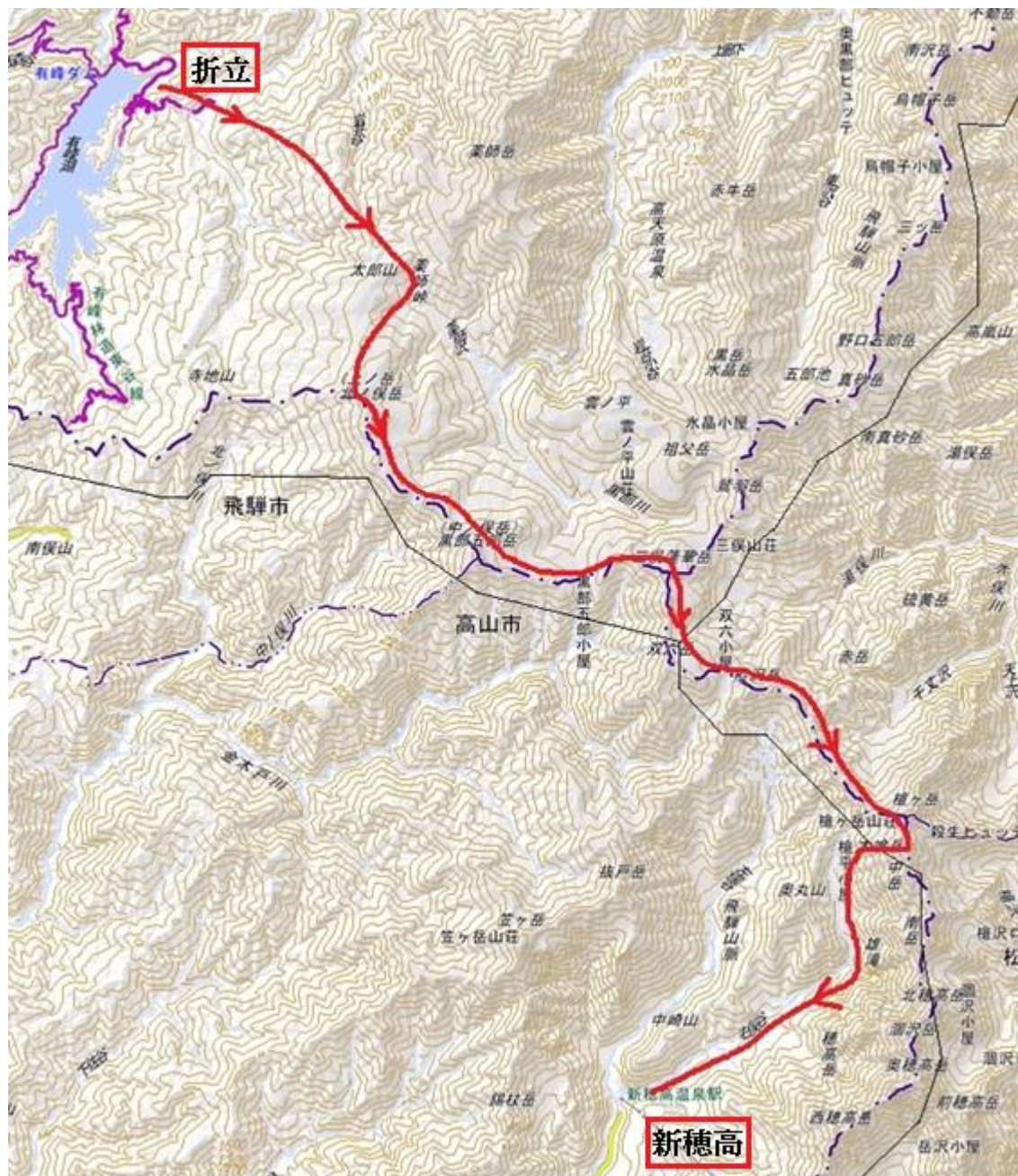
歩きづらい道の間にも、左方を見上げれば穂高の稜線が、岩稜が雪と岩の見事な景色を見せてくれます。この素晴らしい景色があつてこそ、歩を進める事ができたといつてもあながち間違いでもなかったと思います。とりわけ西穂高のドームは今でも目に浮かびます。

「越中おわら節」に、「山へ登れば いばらが止める いばら離しゃれ オワラ 日が暮れる」の歌詞があります。この唄を知る事になったのは、山行きの数十年後の事。もし当時も、今と同じく「おわら節」にぞっこんだったら、歩きづらかった帰途も、少しは余裕を持ちながら歩を進める事ができたかも知れません。尤も、新穂高＝高山＝大阪と乗り継ぎ、帰阪は唄よりははるかに遅く、深夜だったのは言うまでもありません。

いずれにしても、懐かしい思い出でした。



行程概念図



# “喰い倒れ” 歴史山行紀行文

(古代と中世のバイエリアを往く)

2017.11.30 木山 裕昭

東京に単身赴任していた時の山仲間が、毎年歴史山行で関西にきており、今年は、11月18日～19日にかけて、二上山と四天王寺、大阪城等を回りました。

18日は、あいにくの雨模様。近鉄当麻寺駅に全員（13名）が集合して、11時前に出発。さすが、女性の多いグループです、駅前で当麻寺名物のよもぎ餅を見つけ、さっそく購入しました。そして、相撲館を横にし、門前通りを山門へと向かいました。15分程で山門に到着。ここで、歴史に詳しい、このグループのリーダーが当麻寺や、中将姫のことを分かり易くトークしてくれました。国宝の日本



最古の釣鐘を見て、落ち着いた佇まいの本堂へ。本堂では、當麻曼陀羅をじっくりと拝観しました。その後、金堂で弥勒仏座像、講堂で阿弥陀如来像を見学し二上山へと向かいました。

小雨の中、20分程歩いたでしょうか、傘堂に到着です。これは、左甚五郎作と伝えられる、一本柱の珍しい建物です。天気が良ければ、大池越しに二上山の雄岳・雌岳が見えるのですが、ガスがかかり今日はまったく見えませんが、雨もやみそうにもなく、安全を考えて、ここで二上山登山を断念しました。近くにあり、鳥谷口古墳を見学。



仲間に古墳の詳しい人がいて、説明してくれました。





そしてコースをかえて、二上山ふるさと公園に向かいました。山の辺の道に似た道を 30 分程歩くと到着。ここでは、二上山に向かう、400 段の階段を前に、「いやーこれは急で登れないわ」とか言いながら、集合写真を撮りました。その後、二上神社口に向かいました。

この頃になると、雨も上がり、二上山の姿が見え、「おーあれが登る予定だった山なんだ」と、歓声が上がりました。

二上神社口からは、近鉄電車で阿倍野橋へ向かいました。ここからは、地下鉄に乗り換え、谷町九丁目へ。上町台地をそぞろ歩きで、高津宮に行きました。ここは仁徳天皇が、この神社の高殿に昇られ、人家の炊煙が乏しいのを見られて、人民の窮乏を察し、直ちに諸税を止めて庶民を救済されたところです。その場で、この話を聞くと、とても臨場感があります。



古代の歴史を学んだあとは、道頓堀へ。有名なグリコの看板や、法善寺横丁の水掛不動へと、ミナミの街を歩き、ディープな大阪を体験してもらいました。東京から来た人たちだけに、テレビでは見たけど、本物を見るのは初めてと、グリコの看板には、しばし見入っていました。





そして、あべのハルカスのビュッフェレストランで夜景を見ながらの夕食懇親会を行い、天王寺のビジネスホテルに泊まりました。

19日は、ホテルを8時半に出発して、通天閣のある新世界へ。ここは、串カツで有名なところです。「ソース二度漬け禁止」の看板のお店や、朝から一杯やっているお店もあります。いやー、大阪人の元気を感じました。



次は、天王寺公園を横切って、大阪夏の陣で活躍した真田幸村最後の地である安居神社へ、幸村を偲んだあとは、茶臼山古墳へ。ここも、真田幸村由来の地で、のぼりや名言を書いた看板が立っています。



そして、聖徳太子が建立したと言われる四天王寺へ。スケールの大きなお寺です。



天王寺界隈をウォーキングした後は、地下鉄で谷町4丁目へ移動。  
そこから、大阪歴史博物館へ。ここで、難波宮について、学芸員の方から説明を受け、博物館の地下にある、柱跡を見学。  
そのスケールの大きいのびびっくりです。  
その後、博物館に入り、大阪の歴史を古代から近代までじっくりと見学、大阪が天下の台所であったことも分かり易く展示してありました。



そして、いよいよ最大の見所である、大阪城天守閣見学に行きました。たくさんの外国人観光客が来ています。天守閣の回廊はあふれんばかりの人です。  
ここから見る、大阪城公園の紅葉は見事です。



天守閣から降りてきて、新大阪に向かいました。ここで、お好み焼きを食べながらの反省会をしました。まさしく「喰い倒れ歴史山行」を象徴するかのようなフィナーレです。そして、1年後の再会を期して、帰路に着きました。 (完)

104歳というのは、今は亡き<天国>の母である、母は102歳で亡くなった。今はどうしているのかと、便りを出そうと思ってみても、これは叶わないだろう。私は信仰がないので、父や母の様に天国の門をくぐることは出来ない。

現在、この母の<遺品>である、日記や家計簿など、段ボール2〜3箱もある数十冊のノートや、写真アルバムなどが、私の部屋の机にひっそりと積まれている。

私は今密かに、これを<別の形>に変えて残そうとしている。

一つにはコンパクトにして残したい、二つめは人が読みやすい形にすること。

まず母の誕生から死までの年表を作るため、母の年齢や、住所に加え家族の出来事や社会的な事件などを書き込む、こうすれば大体、日々の母の思いや、母がどのような時代に生きてきたかが分かったら考えた。同時に自分自身の生い立ちや成長の過程をぼんやりと追想できそうである。(ちなみに母の日記は2009年96歳の1月から6月まで現存する)

西暦年に月・日を入れて日記のページを当てはめてゆく、これはPCにあるエクセルという編集ソフトを使うことにした。

例えば1959年・昭和34年・2月20日(誕生日)年齢46歳・・・と検索すると

2月の1日から30日迄の日記のすべてが読めるようにする。(もちろん書き込みの無い日もあるが) この年の4月には皇太子(現天皇)と美智子妃のご成婚パレードがあった、といった具合だ。

それには全ての日記を一ページ毎にプリンターでスキャンし画像のファイルを作り、これを年表に添付して行けば、どこからでも自由に検索できる、さらにアルバム写真などの撮影日が分かるものは同様に添付してゆく。こうすれば文章と映像がリンクし、追想がより深まる。

こうやって母の一代記?編纂の計画を立てているのだが、とにかくやっとな編を作り終えたが、思い描いた完成の形にはまだ遠い。

これが今となっては、なんの親孝行にもならないことは明白だが、母が残してくれた日記を破棄する前に、なすべきことが見つかった気もしている。

もしこの事を天国にいる母への手紙にでも書くことが出来るなら面白いと思うのだが。

ついでながら、今、個人のデジタル遺産という言葉を目にする。

これまでPC内に貯めこんだ様々な<遺産>すなわちデータのことであるが、私の亡き後このデータがどうなるのか、果たして家族や誰かに引き継ぐものがあるのか?

ブラックボックスの中にあるデータは私しか知らないところが問題で、母の遺した日記のようなものと、誰でも一目でわかるのであるが、これがアナログとデジタルの違いである。

今個人で所有するデータ類(私の場合、かなりな数の写真や文章類その他)について、これら世間的に価値のあるものは有ろうはずもなく、全て失われても何も問題ないし、家族や人に迷惑がかかることも無いだろう、従って即<消去>で可とする。否消去せよと遺言ではっきり言わなきゃならない。箱から出てさまよい歩くようでは困る。人によっては金融関係や遺産の内容、保険の資料のものなど、他にもマル秘データがあるかもしれない。

情報は氾濫しているが、便利になったのは引き換えに本当に重要な資料が人の目に触れなくなった現代社会は、安全、安心かつ公平なのだろうか?人はまた一つ難問を抱え込んでいる。(終)

## 2017年「八剣山の会」活動実績

(1/1)

2017.12. 7

|    | 月 日             | 行 先            | 企画者 | 参加者   | 備 考  |
|----|-----------------|----------------|-----|-------|------|
| 1  | 1月26日(木)        | 金剛山            | 高見  | 8名    |      |
| 2  | 2月18日(土)        | 高見山            | 須藤  | 5名    |      |
| 3  | 3月9日(木)         | 大阪城観梅          | 金城  | (6名)  | 雨天中止 |
| 4  | 3月23日(木)        | 六甲縦走 part4     | 真田  | 4名    | 縦走完了 |
| 5  | 3月30日(木)        | 琵琶湖、湖北 part6   | 美浪  | 4名    |      |
| 6  | 4月13日(木)        | 青根ヶ峰～吉野山       | 須藤  | 4名    |      |
| 7  | 4月20日(木)        | 屏風岩公苑花見        | 木山  | 10名   |      |
| 8  | 5月11日(木)        | 葛城山つつじ鑑賞       | 木山  | 10名   |      |
| 9  | 5月18日(木)        | 白鬚岳            | 高見  | 6名    |      |
| 10 | 7月2～3日<br>(日～月) | 弥山－八経ヶ岳        | 小出  | 5名    |      |
| 11 | 7月21日(金)        | 竜門岳            | 須藤  | 4名    |      |
| 12 | 9月7日(木)         | ウワナベ古墳         | 金城  | (10名) | 雨天中止 |
| 13 | 9月22日(金)        | 金勝山(湖南アルプス)    | 安田  | 3名    |      |
| 14 | 10月6日(金)        | 大宇陀松山城跡        | 安田  | (4名)  | 雨天中止 |
| 15 | 10月25日(水)       | 又剣山            | 高見  | (10名) | 雨天中止 |
| 16 | 11月2日(木)        | 長坂山(赤目四十八滝)    | 増谷  | (4名)  | 中止   |
| 17 | 11月16日(木)       | 京都一周トレイル part5 | 美浪  | 3名    |      |
| 18 | 11月23日(木)       | 春日山原始林         | 上岡  | 3名    |      |
| 19 | 12月7日(木)        | 納会 (美榛苑)       | 須藤  | 12名   |      |



## 2017年八剣山の会納会

2017.12.10 木山裕昭

12月7日(木)、17時半より美榛苑にて恒例の納会を行いました。

参加者（敬称略）

小西益樹、金城清三、美浪敏明、真田一郎、三明博夫、高見毅  
小出雅康、赤井友洸、増谷育男、上岡啓二、青木篤、木山裕昭

ロビーには、美榛温泉で入浴を済ませたメンバーや、フロントへ直行の方々  
が集まり、和やかな雰囲気です。納会の開始を待ちました。



宴会場に全員が集まり、いよいよ納会の開始です。冒頭に、今年9月4日に満  
75歳でお亡くなりになられた、我々の先達、林田さんへ1分間の黙とうをしま  
した。

そして、高見さんから、2017年活  
動実績の報告がありました。その  
後、参加者おひとりおひとりから、  
近況や山への思いなどを話して  
頂きました。



いよいよ、宴会の開始です。金城さんのご発声で乾杯をし、美味しくビールを頂きました。

大和遊膳に舌鼓を打ちながら、アルコールも入り、歓談の雰囲気も盛り上がってきました。そうした中、皆さんに来年登りたい山を言ってもらいました。



高見山（厳冬期）、伊吹山（高山植物の時）、尾瀬など魅力たっぷりの山の名前がでてきました。やはり山仲間です、しばし山談義に花が咲きました。



ほぼ、候補の山が出揃ったので、今回の納会のもう一つの楽しみである、カラオケへと移りました。



トップバッターは三明さん、続いて上岡さんと、自慢のノドを披露されていきます。次々と、歌い手が舞台上上がり、演歌あり賛歌あり唱歌ありの楽しいカラオケになりました。



そして、最後は威勢よく美浪さんの一丁締めで、納会をお開きにしました。



2018年も山登りを大いに楽しみましょう！

(完)



~~~~~

編集後記：＜朝日受け初冠雪の大和富士＞この俳句は、編集委員の木山裕昭さんが12月9日の早朝に詠んだものです。冠雪の大和富士を裾から見上げた光景です。映像の浮かぶ立派な写生句です。我が町にもいよいよ厳しい冬の到来です▲年の暮と年明けを前に平成30年新年号（20号）をお届けいたします。春秋誌発行の担い手須藤さんが病に倒れ、今号の発行が危ぶまれたのですが、寄稿の皆さんと編集委員のご協力、そして退院後の須藤さんのアドバイスの応援もあり発行に漕ぎ着きました▲中国・桂林の岩峰を描いた素晴らしい表紙絵は小西さんの作品ですが、小西さんに頼んで今号から＜八剣山の会春秋＞のタイトルに振り仮名を付けることにしました。＜はっけんざんのかい＞と、しばしば誤読されたからです▲今号のトップ記事には、金城の＜年賀状の俳句から＞としました。慣例では山の会の公式行事の紀行文をトップにするのですが、新年号と年賀状の組合せが良いからと高見編集委員の提案でこの案が採用され、恐縮ですが小生もこれを受け入れたからです。センチメンタルな郷愁の句が多く申し訳ありませんが、お許してください▲9月から11月に掛けての山行計画は6件でしたが、雨で中止になり実際に実行されたのは3件でした。記事のタイトルで表示すると、安田さんの「奇岩金勝山」（湖南アルプス）、美浪さんの「京都一周トレイル part5」高見さんの「春日山原始林」。参加者はどちらも3名と少人数でしたが、山行記事を読むとその内容は濃く自分も参加したらよかったと悔みました。歴男で評される安田さんは、＜龍王山で、1200年前に、こんな山奥に磨崖仏を彫ったり寺を建てたり、古代の人の力、宗教の力に驚く＞と感動しています▲赤井友洸さんは夏季号の「尾瀬」に続いて＜槍沢を滑ってみんとて＞を寄せてくれました。♪越中おわら節♪の歌詞で色付け？しての槍沢での逸話、夜の明けきらぬ時間に一軒一軒を訪問してタクシー代わりを頼む話や、雪庇での一晩の恐怖などハラハラドキドキの体験でしたね。おかげさんで♪越中おわら節♪とはどんな民謡だろうと興味が湧いてきました。▲美榛苑で行われた＜2017年八剣山の会納会＞は木山さんが写真を多用して宴会の賑やかにして楽しい雰囲気伝えてくれました。皆さんカラオケにもはまってました。彼は初めての納会世話役も立派に仕上げてくれました。木山さんは又、寄稿文＜喰い倒れ歴史山行紀行文＞では旧知の他府県の13人を大阪や奈良への案内役をこなしています▲寒さはこれからが本番です。健康管理をしっかりと、元気に新年を迎えましょう。来年も「春秋誌」への更なるご協力をよろしくお願い申し上げます。

次の春季号（第21号）は、原稿締切2月末日、発行日3月20日です。寄稿文宜しく願いいたします。なお編集委員から個々にもお願いすることもあります。その節はよろしくご協力ください。

金城

~~~~~